

おるご〜る '99¹/₂



特集 和光のお父さんたちのいま
— 家事・育児・介護 —

活躍するボランティア

和光市ボランティア連絡会(個人・団体)は、市民としてお互いに協力し合い、助け合いながら、みんなが安心をして暮らせる「まちづくり」を目指しています。ひとり暮らし高齢者の会食サービス、地域での家事援助、話し相手、また特技を生かしての手話・朗読・点訳、市内福祉施設での作業の補助など、様々な活動をしています。

ボランティアセンター登録団体サークル名

・いづみ会	(会食)	・南ボランティアクラブ	(地域活動)
・若竹会	(会食)	・さくらの会	(ガイドヘルプ)
・さくらんぼの会	(会食)	・さつき苑ボランティアクラブ	(施設活動)
・火曜料理クラブ	(会食)	・グリーングラス	(施設活動)
・和光手話サークル	(手話)	・ひまわり	(施設活動)
・和光朗読の会	(朗読)	・希望会	(施設活動)
・あいの会	(点訳)	・すわ緑風園ボランティアクラブ	(施設活動)
・国立埼玉病院絵本とお話の会	(地域活動)	・ボーカル和光	(コーラス)
・あじさいボランティアクラブ	(地域活動)	・グループゆう	(琴の演奏)

* ボランティアに関するお問い合わせは 和光市ボランティアセンター(社会福祉協議会内)までお願いいたします。TEL 464-1111内線2607

編集後記

苦手なことへの挑戦、全てが勉強の1年でした。インタビューを通し、人間への興味が更にわくとともに、多くのことを学びたいと思うこのごろです。(千)

表現する側の大変さもありませんでしたが、参加者の方々とふれあいがありよかったです。また多くのことを考えるきっかけになりました。(敦)



表紙
「森の演奏会」
作：吉田紀子
(和光市下新倉在住)

発行日 1999年2月
編集 和光市女性問題行動計画推進委員
黒岩千津子・石田敦子
女性問題アドバイザー
尚美学園短期大学助教授 諸橋泰樹
発行 和光市政策管理部政策室
351-0192和光市広沢1番5号
TEL(048)464-1111 内線2327

※この情報紙は再生紙を使用しています。

介護福祉士として活躍する男性

これからの日本は、高齢社会を見据えて、老人の介護の問題が大きくクローズアップされてきます。介護というと、どうしても女性が担うことになりがちですが、男性でこの老人介護を仕事にしている方がいます。介護福祉士の中尾泰次さん(33歳)は、福祉の里ナーシングホーム和光の寮母主任として先頭に立って働いています。介護福祉士になろうと思ったきっかけや仕事の楽しさ、男性と高齢者介護などのお話を伺いました。

介護福祉士になろうと思った動機はどのようなことですか。

私が高校生の時に母が亡くなりまして、それから伯母が面倒をみてくれました。私が企業に勤めるようになると間もなく、その伯母が透析を受けていたこともあって病状が思わしくなくなり、病院への付添い、介護も必要とするようになりました。ちょうどそのころ勤めていた企業もバブル崩壊にあたり縮小を余儀なくされ、工場も東京から山形へ移転するというところで、面倒をみてくれた伯母を置いて転勤することもできないので会社を辞めました。家において介護

をしていると、「よその高齢者を介護するのも家の高齢者を介護するのと同じ」と思えるようになり、伯母は一昨年亡くなりましたが、それが29歳で福祉の里ナーシングホーム和光へ勤めるきっかけになったような気がします。



介護福祉士の中尾泰次さん

仕事をしたい、楽しいこと、大変なことはどんなことですか。
うれしいと思うこと、入所者

の能力が上がって、会話ができるようになったり、寝たきりの方が車椅子に乗れるようになり、車椅子の方が自立歩行できるようになったり、入所者の心身の状態が少しでも改善されることでしょいか。介護される人はもちろん、介護する側の喜びとこれからのエネルギーをいただいたような思いがします。また大変というかつらいのは、日常の業務に追われ、心に余裕がないとそのことが相手に敏感に伝わり、納得のいく介護ができない時です。私は忙しくても1人対1人でみるような気持で個別介護を心がけ、その人にふさわしいケアを実施することをモットーとしています。

話すればいいのかわからないで困ったのと、男性である自分が、女性のおむつ交換などをする



こと、こちらでも困ったし、相手の方もいやることもありましたが、また最初のうちはどうしても高齢者を介護するのに手を貸してしまいがちでした。普段からよく観察をし、その方のできる範囲を把握して、「ここまでやってみましょう」と本人の努力をうながすようなしかたを試みています。お年寄りの笑顔が見られたり、やる気を出してくれたりと、介護者自らも楽しんでやっていると

仕事をしたい、困ったことはどんなことですか。
この仕事に初めて就いた当時、ずっと理系畑の男性が多い世界で生きてきたので、10歳も若い女性の職員がほとんどを占める職場に來てずいぶん戸惑いました。それと、高齢者の方とどんなことをお

家庭での介護についてのアドバイスをお伺いします。
介護する側に余裕がないことが、受ける側の人に敏感に伝わります。

このことは施設においても同じことが言えますが、在宅介護の場合は顕著に出てまいります。そして介護する人もされる人も体力的・精神的に共倒れをしてしまう場合もあります。その前にぜひ福祉の里のショートステイ、デイサービス、ホームヘルパー、訪問介護などの社会資源をできるだけ利用して、負担を解消し、リフレッシュしていただきたいと思えます。高

齢社会によって、女性だけが介護をするような状況ではなくなっています。男性もその時に意識の変革を迫られざるを得なくなるでしょうが、在宅だけでなく一時的に施設利用・支援を受けるといったことも視野に入れてもらいたいですね。

現在の高齢化は、16%を超え、近い将来4人にひとりには65歳以上の方になることが予想されています。また、「世界の長寿国」となった今、介護を必要とする期間もそれだけ長くなったことを示しています。介護することは精神的にも身体的にも大変なことですが、私も一般企業に勤めていたので、仕事の大変さもわかります。だからと言って介護を妻に全て任せて

しまうのではなく、せめて「日中どうだった」「どんなことがあった」など話を聞いてあげられるだけでも精神的負担を軽減できると思います。できれば実際に介護を自分の手で確かめていただくためにも、介護教室に参加するなどしてみていただければと思います。

市民の声

介護は共にするもの

介護の問題が身近なこととなつて6年になる。父の癌による入退院に始まり、仕事として介護に携わることになったり、また私の身の回りには友人達や姉が経験した介護を見聞きすることでとても多くのことを学んだ。その間、介護福祉の学校に入り、さらに学びを深めた。人生の最後の時を共に過ごすということは大変重いテーマをつきつけられる。老い・病氣・死、それに伴う不安・恐怖・孤独。よく

死ぬためにはよく生きること。何かの本で読んだとき深く胸にしみた。介護することは心身共に大変だが、その分得ることもたくさんある。しかし、社会の意識がなかなか変わらないため、介護はほとんどの場合、妻が嫁の役割となっている。厚生省も目前の超高齢社会に備え、介護ヘルパーの増員、老人施設の増設を進めてはいるが、利用する側にとられがあるため、家にヘルパーが入ることを家族が嫌がったり(見栄のため)、施設を利用することを介

護される者が嫌がる(恥のため)というところがまだ根深くある。そして介護にあたる妻や嫁が、社会が押しつける「介護は女がして当然で、それができなければ悪い妻・悪い嫁」の無言の重圧に従い、一人背負い込んでしまつことになる。その結果、体力がついていかない妻は病気になるケースもよくあるし、ストレスをため込んだ嫁の場合、神経症的な病気をひきおこす。さらに介護者が一人で背負いきれなくなると介護される者に対し、「いじめ」を始めるケ

ースも多い。介護者はその自分の行為に罪悪感をもち、よけいみじめになる。これではつらさばかりが残る。何も得ることができない。介護の大変さはやってみなければわからない。身体だけでなく心もくたくたになる。質の高い介護は、家の中だけで、また女性一人だけでできるものではない。男性の「介護は共にするもの」という積極的な態度と、公的サービスの充実、そして社会の意識の変化が絶対に必要である。

家事・子育て参画お父さん

和光市下新倉在住の河西誠一郎さん(44歳)は、現在、中学3年生と中学1年生の男の子2人のお父さんであり、お琴と三弦のお師匠さんです。この世界は女性が多く、生田流のプロで活躍する男性は全国で30名ほどと数少ないそうですが、美しい日本の伝統音楽を残していきたいと言う河西さんに、男性の目を通した家事・子育てのお話を伺いました。

家事をするようになったきっかけはどのようなことですか。

妻(航空会社に勤務)が空を飛んでいまして、仕事もずっと続けていきたいということでしたので、在宅での仕事が多い私が自然とずるようになりました。お互い協力することで家庭が成り立てば「女性だから、男性だから」ということではないのではないかと思います。

普段の家事はどのようなことをなさっていますか。

主夫(?)ですので、皆さんと同じに掃除、洗濯、買い物などですが、家事は、やればやるほどきりがいいものです。中でも食事は毎

日のことなので重点を置いています。学生の頃から、食べ物関係のアルバイトを好きでやっていたこともあって、抵抗はありませんでした。どうせ作るなら、楽しみながら自分の手で作った方がよいと思いますし、子どもがアトピーだったこともあり、添加物を使わずおいしく食べさせることを心がけました。



子育てはどのようにされましたか。
育児については、子どもが生ま



家事をする河西誠一郎さん

れたときに夫婦で話し合い、親の手で育てた方がベターということになり、家にいる私が分担することになりました。

母乳で育てましたので、妻が仕事の時は、母乳を冷凍保存して子どもに与えましたが、ほ乳瓶の口に吸いつかなくて困ったりしたこともあります。保健センターの予防注射などに私が連れていきますと、女性の「どうして?」という視線もありましたが、一般の男性より抵抗がなかった気がします。子どもを育てるのは真剣ですから、

恥ずかしいなどと言ってられませんでした。また、自分の仕事の時などは、お琴を習いに来た皆さんが子どもを見てくださったたり、母に見てもらったりと我が家なりの育て方をしてきました。
女性の子育てをみて私が感じるのは、子育てに一生懸命すぎて親の生き方を子どもに「見られている」という意識が少ないような気がします。我が子であっても個性は親と違いますので、その子の良いところを見つけ、伸ばしてあげることが大切ではないでしょうか。
お子さんの家事参加はどのようなさっていますか。

男の子だから家事をやらなくていいというのではなく、自分自身の回りのことを含め今は抵抗なくやっています。家事の分担を親としてはつきり与えてしまうと、やらないときに親も子も文句を言うようになりがちなので、いつでもやれる気持ちの状態をつくっておくことが、良いような気がします。

働く女性をめぐる課題は、何だと思いませんか。

多くの女性が社会に進出していますが、その核のほとんどは男性がつくったもので、そのギャップは非常に多いと思います。家庭のあり方も含め社会の中で女性が働く環境を、もつと考えていかねばならないと思います。

典型的な日本家庭に育ったというのですが、こだわらない考え方がなくなった要因は何であると思いますか。

時代は、女性、男性を問わずそれぞれの能力を求めています。お互いの生き方を知ることがよりよい社会、家庭をつくるのではないのでしょうか。

妻が持てる力を充分発揮し、気持ちよく働けるために私ができることは何かと考えたら、その一つが家事参画でした。それによって私も知らなかった世界が見えて大いにプラスになりました。

妻が持てる力を充分発揮し、気持ちよく働けるために私ができることは何かと考えたら、その一つが家事参画でした。それによって私も知らなかった世界が見えて大いにプラスになりました。



市民の声

男の子育てー理想と現実

私と夫はもともと子どもを持つつもりは無く入籍もせず別姓で暮らしていた。夫は女性も働くのが当然と考える人である。しかし私

は妊娠するとすぐ会社から退職職を聞かれ「お大事に」と言われた。完全なマタニティブルーの状態のなかで私は『男の育児書』という本を買った。ひとりの人間を育てるといって重大な仕事を私ひとりでは背負いきれないという意志表示のつもりで2人で産むと決めた時から2人で育児がはじまるのだ、と。

しかし現実には想像を超えた。夫の仕事が多忙な時期(それは年の半分以上にもなる)には休日も無く、深夜帰宅の毎日。赤ん坊と顔を合わすのは朝起きた瞬間だけ。『男の育児書』を活用するなど夢物語に近い。もっぱら私が読んでいた。それで

も、夫は時間さえあれば育児に協力してくれた。ウンチのおむつも交換するし、ほとんどの事を頼めばやってくれる。仕事の忙しさやストレスを考えたら、これ以上は望めないだろうと私は夫に感謝しているが、密室育児でストレスのやり場のない妻

としてはこれで満足とはとても言えない。そして夫も、女性も仕事を持つべき、という持論を実践したら自分にどれほどの負担がかかるかを知って、そのことを口にしなくなった。私も仕事と育児全般を両方抱えてやっていけるのか自信はない。少なくとも夫のように多忙な仕事では立ちゆかないだろうと思う。ちなみに夫の職場では子どもがいて妻も働いている同僚は1人もいないのである。

子どもは間もなく3歳になる。唯一の楽しみである夏休みには北海道

でキャンプもした。休日には夫は子どもの面倒も見てくれるが、時々キレそうになっているのが私には面白い。子育てをしていると、自分がんなんにも短気でカッとなる人間だったのかと思ひ知らされるのだ。そして子どもの世界の奥深さ、可愛さも想像以上である。男の子育ては現実という高い壁があるけれど、やって損をするというよりやらなきゃ損だとハタで見ている妻は確信する。
(白子在住 ペンネーム 野宗玲子)

輝くPTA会長・副会長

このごろはPTAそのものがなくなっていく中で、和光市立第2中学校のPTA会長、副会長として輝いている女性たちがいます。特別なことではなく、ちよつと意識を変えらるることにより、「誰もができる」とおっしゃるPTA会長と、お2人の副会長にお話を伺いました。

今何ができるか、できることをやろう、何か変えなければ。

何事も率先していかれる方たちなのかと思っていました。就任に迷いながらも「今できることをしよう」と引き受けられたとのこと。「この役にたずさわって成長させてもらっています。勉強もできますし、人のためというよりも自分のためにやっている感じだけです。それでみなさんに喜んでいただけののが最高」と活き活き語る姿。お互いの立場を認め助け合っていく―信頼関係と協力体制に、

女性同士だからこそ分かって合えることがプラスとなり、小さな力が大きな力となって回転している

ことを感じました。



和光市立第2中学校PTA会長の森優子さん

会長になって引き出された夫の協力や子どもたちの協力。

活躍する女性

女性だからこそ、女性であるが故に。

ともすると地域の会議は男性社会の象徴のようなものですが、「女性の目でもが言えることがメリット」と言います。副会長の内藤礼子さん松下匡世さん共に女性の目を通したきめの細かい運営をしています。気楽に参加できるような身近なPTAづくりの推進、親同士のコミュニケーションを図るための懇親会の増設、夏休みの除草作業における父親参加の場の設定、情報提供も配布物にとどまらず声を掛け合うなどきめの細かい活動を展開しています。これも「女性同士の連携によるもの」と3人が口をそろえて言いました。

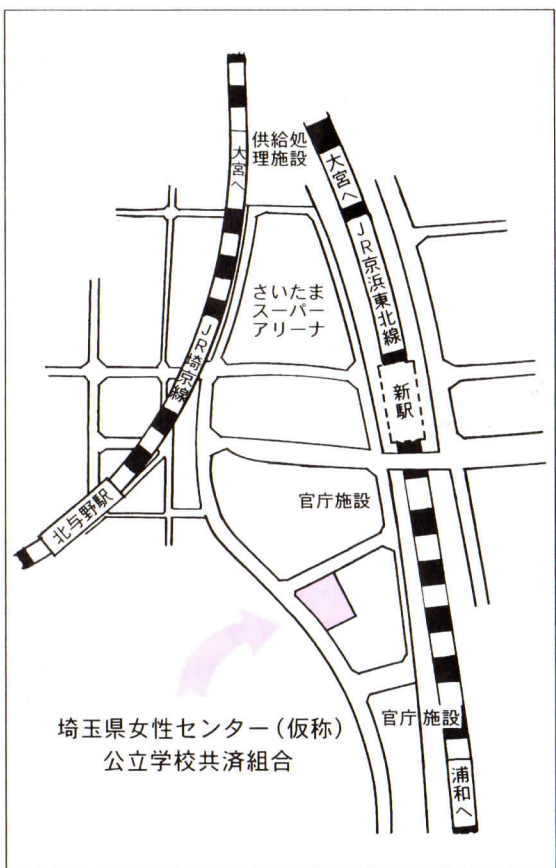
けれども、活動に関わる役員は女性が多いのですが、上に立って運営する人は男性がほとんど。「女性の視点で声を上げて理解を得られないこともあります」という指摘もなされました。地域の会議に付き物のお酒があったり、

男性であるとするんが運ぶことが女性であるために難しくなることがあつたりと、「男性社会であるがゆえのとまどいは隠せないようです。」

まず行動を起こすことからはじまる女性のエンパワーメント。

「これからのPTAは、組織の簡略化、会議の時間帯や父親参加の場の検討など、課題がたくさんあります」と森さん。「まず学校に関心を持って参加してください。勇気を出して役員をやってみると関心を持つようになり意識も出てきます」と、内藤さんと松下さんはひとりでも多くの参加を呼びかけます。まず、行動を起こすこと、そこから始まることがあるのではないのでしょうか。

埼玉県女性センター(仮称)の設置場所が決まりました。



豊かな彩の国づくりを進めるためには、女性も男性も共にその個性や能力を十分発揮し、あらゆる分野に参画できる男女共同参画社会の実現が求められています。そこで、かねてから県民、女性団体などの強い要望であった埼玉県女性センター(仮称)が2002年度(平成14年度)当初の開館を目指し、さいたま新都心に建設されることになりました。公立学校共済組合との複合施設として県内各地域から集まりやすく交通利便の良い場所です。女性に関する様々な問題の専門機関としての窓口でもあり、また、情報収集・提供、活動支援、相談などの各分野でのネットワーク化も特色となっていますので、市民の皆様も利用してみたいかがでしょうか。

埼玉県女性センター(仮称)の概要

- 1 延床面積
 - 専有面積 約 3,600㎡(2フロア)
 - 共有面積 約 2,000㎡(ロビー、機械室等)
 - 合計 約 5,600㎡
- 2 主な施設
 - 交流ラウンジ、学習・研修室、情報コーナー、相談室、展示スペース、保育室等

会長の森優子さんは、役員を引き受け今年で2年目。家族は夫と4人の子どもの大家族、今年は和光市PTA連合会の副会長も引き受け大変な忙しさ。やってこれたのは森さん自身のパワーもさることながら、家族のバックアップも大きいでしょう。「2年目の会長を引き受けるとき、子どもたちはあまり賛成ではありませんでした。が、一生懸命やっていることで理解してくれました。」やれることはやった方がいい「と私が活き活きしているのをうれしく思う夫は、良きアドバイザーです」と言います。

お母さんが忙しい分だけ、お子さんたちも自分のことだけではなく、家の中のことをやらなければならぬようになります。1年目の時は、寝たきりになったおばあさんの介護もしたそうですが、「孫である子どもたちに介護をやってもらって母も喜んでいました」と言います。「当の子どもたち自身は、ものが豊富な時代に、よその子をやらやましがたり、親が忙しくて



副会長の内藤礼子さん 会長の森優子さん 副会長の松下匡世さん

面倒を見てもらえないなどいろいろな思いでいるようですが、その子より良い体験をさせていただいています」と、お子さんたちが自分の参加する場を持っていることをプラス思考でとらえていました。森さんが会長を引き受けたことよって、家族のまとまりが出てきたのだといえるでしょう。